

全国カレッジフットパスフォーラム2019

—学生が考える持続可能な未来について—

里山学研究センター研究員

鈴木 龍也

里山学研究センター・リサーチ・アシスタント

野間 元綺

フットパスとは「森林や田園地帯、古い街並みなど地域に昔からあるありのままの風景を楽しみながら歩くことができる小径」(日本フットパス協会)として地域の人々が里道などを中心にルート化した道のことである。フットパスのルートづくりやフットパス・マップの作成の過程などが地域内でのコミュニケーションを活性化し、地域資源の発見・再認識を促す。地域外からの来訪者との交流で示される外部者の目を通して地域居住者に地域の価値への気づき、再評価がもたらされる。さらには地域の「交流人口」を増加させるなど、フットパスづくりは様々な形で地域活性化につながるツール、運動として注目されるようになってきている。

また近年は、フットパスづくりに学生が大学の教育の一環として参加・協力する例が多くみられるようになってきた。学生のフットパスづくりへの参加は、フットパスづくりへの強力な支援になるのはもちろん、参加する学生にとっては地域資源や地域コミュニティの在り方について学ぶ機会、地域住民との交流の中で現実社会のなかでの能動的なコミュニケーションの在り方を身に着ける機会となるなど多大な教育効果をもたらすものと評価され、最近では大学だけでなく高校でもフットパスづくりに取り組むところが出てきた。そしてフットパスのそのような教育効果が注目されるようになるとともに、広い意味での環境教育の一環としてのその意義や可能性、問題点、さらには具体的なノウハウ等についての研究が行われるようになってきている。

龍谷大学里山学研究センターは、学生組織の「龍谷大学みらいの環境を支えるプロジェクト」と協力して、主に東近江市におけるフットパス運動に参加しつつフットパスの地域づくりにおける意義や可能性について研究するとともに、大学生に対する環境教育の一つとしてのその有効性や問題点等について研究を続けてきている。

カレッジフットパスフォーラムは、フットパス活動を行う学生、そして学生のそのような活動を促し、支援し、研究する研究者らが相互に経験を交流し、学びや研究を深める機会として4年前から毎年1回持ち回りで開催されているものであり、本年度は11月16日～17日、本センターと龍谷大学みらいの環境を支える龍谷プロジェクトの主催、東近江市役所、滋賀県庁の共催、フットパスネットワーク九州の協力で、北は北海道科学大学から南は熊本県立大学まで全国8大学、1高校、学生94名、教員9名、関係者12名が参加して「全国カレッジフットパスフォーラム2019—学生が考える持続可能な未来について—」が開催された。

16日午前にプレフォーラム的位置づけの「市民向けワークショップ」と猪子山フットパスのフットパスウォーキングを行った後、16日午後から17日昼過ぎまで3部におよぶフットパスフォーラムを行った。

16日午後「愛東コミュニティセンター」で行われたフォーラム第1部は本フォーラムのメインプログラムで、東近江市市民環境部長・玉沖貞彦氏、滋賀県琵琶湖環境部長・石川康久氏、本センター長・牛尾洋也氏の開会あいさつのち、谷口良一氏（マキノ自然観察倶楽部）の基調報告「エコツーリズムで地域を開く」、参加学生による活動報告が行われた。学生による活動報告のタイトルは以下のとおりである。

〈分科会1〉

北海道科学大学①「これまで3年間、北海道各地の地域の歩く活動に参加して」、

「ウォーキングに対する意識調査」

阪南大学「海外フットパス調査報告」

久留米大学「フットパス活動報告」

北九州市立大学②「筑豊フットパス」

中間高校「中間高校 通谷フットパス」

北海道科学大学②「円山・大倉山における歩育企画の考案とグラフィックデザインの制作」

「手稲歩く観光ルート創造プロジェクト」

〈分科会2〉

北九州市立大学①「京築チーム」

佐賀大学「佐賀大学 発表」

北海道科学大学③「手稲山麓における自然歩道等の利用状況調査と手稲区ウォーキングルートの特徴」

龍谷大学「地方創生における集客プロジェクト」

熊本県立大学「宇城フットパス 永尾・古屋敷コースの再生」

熊本大学「一持続可能な地域づくりへー」

北九州市立大学「築上町フットパスP」

上記の活動報告では、参加した学生が各地で取り組んでいる多彩な活動が紹介されるとともに、地域活性化におけるその意義、学生としての関与の在り方等についての意見、さらにはこのような活動に関する学生の生の感想等が熱く語られた。学生によるフットパス活動はそれぞれの大学での経験の蓄積により安定した活動になってきている面も見られるが、それぞれの学生にとっては常に初めての体験として取り組まれるものであり、緊張や現実社会との関係構築の難しさ等を強く感じる活動であること、そしてそれが逆にまた大きな教育効果を生んでいることが確認できたように思われる。

その後全体会において講評、学生によるパネルディスカッションがあった後、「青年の城」（竜王町）に移動してフォーラム第2部として交流会等が開催され、就寝。そして翌日の17日に二二つ目のメインプログラム、フットパス体験が行われた。

フットパス体験は、9時から14時まで、東近江の奥永源寺地区、愛東地区、八日市地区の3つに分かれ、それぞれ行った。ここでは、各コース15名から40名程度に分かれ、地元の方ない

し東近江市の職員の方のガイドのもと、それぞれの地区を歩き、昼食の際には、地域に根差した飲食店や地元の方の手料理をいただいた。

このフットパス体験において、フットパスを行っている大学ごとに、イベントの際の歩き方が異なるという点は興味深かった。特に九州の大学生は“自ら面白いものを探す”という理念のもと、積極的に地域の方に話しかけることや、コースから外れて珍しいものを探すことなどを行っていた。また、ガイドの近くでしっかりと話を聞く学生もあり、それらの歩き方によって、地域の方の反応も様々見受けられた。このように、「イベント参加者の歩き方についての地域に与える影響」の調査の必要性も感じられた。

このフォーラムでは、東近江市役所の職員と地域の方に随所で関わっていただいた。そして、このフォーラムでの「全国のフットパスを行っている大学生と専門家との意見交換」と「それらの者と一緒に歩くフットパス体験」を通して、我々と市の職員、地域の方が、美里等の本場のフットパスと考え方やあり方に大きなギャップがあることを身をもって経験できた。この経験は今後の東近江市のフットパスの在り方に変化を与えるものであり、その意味では大きな意義があったと考える。